旅　生きる意味を求めて

新夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
旅　生きる意味を求めて

【Ｎコード】
Ｎ１１３５Ｄ

【作者名】
新夜

【あらすじ】
これは、明るい茶色の髪の少女レイと、真っ黒で喋る猫、クロアの旅物語。

プロローグ

ある所に明るい茶色の髪をした、少女がいました。

どうしてだろう？
どうしてそんな顔するの？
どうしてワタシだけ　檻から出すの？

ねぇどうしてここは、寒いの？
ねぇどうしてここは、だれも・・・
だれもいないの？

「研究所のやつ・・・か。」
「・・・・？」
「ここだよここ」
少女は、声のするほうを振り向いた。
そこには、真っ黒な猫がいた。
少女は、おどろいた。
だって見たことが、なかったから・・・
「・・・俺らのことがわからない・・・か？そうかな？・・・たぶんそうだろう？・・・・・俺は、猫だ。いいか・・ねこだ。俺は、真っ黒だが、白とか、灰色だっているよ。」

だいだいわかったと思う・・・・

「　　」
「・・・・？」
「いいやこっちの話さ、・・・・・・ところでお前行くあてあるか

？・・・ないだろ？なら俺と来い、このままだとお前が死ぬからな、ここは危険だ。早く出たほうがいいしな。」
こくりと少女は、うなずいた。
「じゃぁ行こう、そうだ名前いってなかったな・・・俺の名は、クロアだ。苗字は無いお前の名は？」
少女は、首を振る。

「そうか・・・じゃあレイってどうだ？意味はゼロだ、だってゼロから始めるだろう？」
少女はうなずいた。
「そうか・・・じゃ行こう。」

こうして少女・・・レイは、旅に出る。
この先知らないことだらけ、だけど・・・進むのだ。
この先はどうなるかも知らないが、行く。

そんな旅の、はじまり、はじまり。

第一章　世界

「こんに・・・ちあ？」
今レイは、言葉をならっている。

「こんにちあじゃなくこんにちわだよ。」
はぁ、真っ黒い猫クロアは、ため息つく

「そういえば、レイ喋ってないな・・・もしかして喋れないのか？」
あれから、小屋を、見つけ、もう夜だからここで休もうということになった。
ちょうど誰もいなかったので、遠慮なく入っているというわけだ。
それでふと気がついた事なのが、レイがまったく喋らないのだ。
だから聞くと・・・

こくり、と頷いたわけだ。
窓見て時間は大丈夫そうなので、発音の練習してるわけだ。

そうしてるうちに、日が昇ってしまった。
どうしてかというと、猫は、夜行性だからいいものの、レイは、疲れは、感じていないらしい
もちろん眠気も・・・そうまるで人形のように無表情だ。
なにかが、欠けてるようなかんじだ。
だけど欠けてないところもあるようだ。さっき体を震わせていたし・・・

「こんにちわ？」
「・・・そう、それであってるよ。」
そう言うとレイは、少しほんの少しだけ笑った。

ほら、ほんの少しだけど、笑った。ずっと無表情だっだので、笑ったのですごく――うれしかったりする。
「こんにちわ、こんにちわ、こんにち「ああ、分かったから、もう言わなくていいよ。」
「そうそうこの言葉意味わね・・・・」

もう少し練習が長引きそうだ。

――レイは今、街を歩いている。
あれから、そう、言葉を最初に教えた日から結構たったのだ。
レイは今、ほとんど知っている。この世界のことも――知っている。

この世界は、もうほとんど人が居ないらしい居たとしてもそれは、人ではないナニカ・・・
そのナニカが、自分のことを、意味するのだ。じゃあ自分はダレと言っても、誰も答えない
――いや、誰も答えられないのだ。だって誰も人ではないもの。レイはそう思った。そう、この世界のもの達は、人じゃない、動物なのだ。
そうそれも二本足で歩き、人語？で話、お店もしたりしているのだ。だが、クロアみたいな例外も居る。クロアは四本足で歩いてる。ごくたまに二本足で歩くが。

「おう、嬢ちゃん」
「こんにちわ」
とワニおじさんが、話しかけてきた。なぜここにワニが！！！という疑問は、この際なしだ。
「お嬢ちゃん、あのさ、この魚貰ってくれないかね。」
どれどれ、とその魚も見る。細長く銀色の魚だ。
「ナニコレ？」

「サンマだよ、細い柳葉型で銀色に輝く魚体が刀を連想させることから「秋刀魚」と言うんだよ。」
「そうなんだ。」
「と言う訳だ。貰ってくれ。」
「？・・・・・・うん、ありがと。」
レイはどうゆう訳か解らなかったが、一応貰ってをいた。――おじさんが、訳を言うのを忘れただけだが、レイは、こういうことが始めてなので、解らなかったのだ。

――こんな世界だ。ワタシの様なモノも他と同じようにしてくれる。優しい、そう優しい世界だ。とレイは思った。

だがこの先、レイは世界は過酷であることも知るだろう。
そんなことを知らないレイは、歩きながら空を見ていた。

第一章　世界（後書き）

あとがき
これを読んでくださった。皆様ありがとうございます。なんかいろいろ、漢字とか間違ってそうでハラハラしてます。間違ってたらすみません。ときどき編集もしたりしてます。すみません。

登場キャラクタープロフィール
レイ

この物語の第一主人公の少女である。明るい茶色の髪で瞳の色は黒、茶色のコートに真っ黒いワンピース、動きやすくスパッツや、短パンを着て、でかい肩掛けバックとゆう服装だが、ちょく、ちょく、変わったりする。年齢は不明だが、外見は１１歳ぐらいなので、それぐらいの年齢だと思われる。表情があまりゆたかじゃないが笑う時は静かに笑うので、感情は有るらしい。
顔に出さないが、この世界が興味があるらしい。
本文にレイは、ほとんど知っていると書かれたがその知っていることは、クロアが教えてくれたことをもとにして、たぶんこの世界の動物達は答えてくれないだろう。とゆう言葉はレイなりの答えなので、ほとんどの常識などは解るが、人に相談などしたら答えてくれるのか？という疑問などということは、考えられないことからまだ、理解できてないのかもしれない。
たった数週間で覚えたのでそうゆうことは、しかたないのかもしれない。

第二章　エリーの日記　上

いかにも、幽霊がでそうな町に、レイとクロアは来ていた。
真っ黒く、瞳が金色で右耳にピアスをしているの猫がクロアで、明るい茶色の髪と真っ黒い瞳
で、茶色のコートに真っ黒なワンピースで、大きな肩掛けバックが服装の少女が、レイだ。
レイ達は、どうしてここに来たのかというと

――町を出てから北を目指していた。どうして行くのかというとクロア曰く「北の大地は、寒くて孤独な感じだろ？だからあまり旅人が行かないんだ。だから行く。」
ということらしい。どうして？っと、聞こうと思ったが止めた。なんか顔が悲しそう顔だから・・・・居心地悪いので、話を変えることにした。
「ねぇ・・・クロア、耳に付いてるそれ何？」
レイは、クロアの右耳に付いてる輪っかを指さした。
「？レイには教えてなかったかな？これはピアスと言うんだよ。これ以外にもいろんな種類があるんよ。俺は・・・この一個しかないけどな」
そう、クロアは苦笑いした。
よし！話を変えることに成功した・・・・のかな？？？
とほんの少し成功したことを心の中にて、かみしめたレイだった。

――そんな会話をしていたら、街が見えたので駆け寄ったところ、この町についたのだ。
町の入り口のところに看板があったのでレイは、近ずいた。
「えっと？・・・・だめだ・・・・字が掠れて読めない・・・・」
「どうする？ここ通らないと次の町行けないが・・・・平気か？」

レイはコクリと頷き、ずんずん町へ入って行った。
「ちょ！！！早いって！！！」
クロアは急いで追いかけた。

――町を歩いて変なことがある。墓がいっぱいある、それもさまざまな墓だ、とあるやつには土をかけ剣が刺さってる墓、石を積み上げてある墓、木の十字架などで、作られた墓ばかりだ。それに家は壊れているのばかりだ。
「なんか寒い・・・・・」
「そうだな・・・・・いつのまにか夜だし」
クロアの言うとうり夜になっていた。
「どうする？今日どこで寝る――」
途中でクロアの言葉が止まった。どうしてだろう？とクロアの向いているほうを見るすると
人が居た髪は白く、目は真っ赤、少し厚い服装をしている少女だ。
レイより身長がものすごく低いから、すごく幼いみたいだ。目があうと、急に少女が走りだした。
「あっ！！！待って！！！」
「待て！！追いかけるな！！！そいつは！！！」
クロアの声も聞こえず、レイは走って行った。

第二章　エリーの日記　上（後書き）

登場人物キャラクタープロフィール

クロア

瞳が金色で右耳にピアスをしている旅黒猫。この世界の住人は、動物で二本足でたって、人語？を話すが、クロアは、ふだん四本足で歩いていて、いろいろな言葉を話せる。レイを拾った？猫であるので一応、保護者。第二の主人公でもある。

エリーの日記　中

レイは、白い髪の人間の少女を追いかけている。
クロアに、待て！！！っと言われたような気がするが、待てなかった。
だって目の前にいる少女は人、いや、この世界は、人でないナニカだ。だからワタシ以外のナニカが居たので、どうしてワタシ達は、生きてるのか、どうして居るのか、知りたいからレイは、追いかけたのだ。そうして今にいたるわけだ。

――走りつづけて約五分いきなり少女が、止まった、いきなりだったので、レイもあわててぶつからないように、止まる。そうして少女を見た。遠くから見たとおり、黒いニット帽、真っ白なほんの少し長い髪に赤い目、大きめの赤いマフラーに茶色いコートを着て、温かそうなワンピースいかにも厚い服装だ。少女は止まっていたが、また歩きだした。レイはあわてて追いかける。
少女は、とある建物の前に止まった。そしてドアを指さしたとたん！！かってにドア、開いた。レイはびっくりした。普通は、ドアノブを回して開けるはずなのに勝手に開いた？？
普通は開かないのに？？？このドアはドアノブが付いてるのに？？？
――おかしい！！！人でないにしても、こんなことはないはずだ。
普通はそう普通はだ・・・・・それじゃあこの子は普通ではないのだろうか？・・・・・少し警戒したほうがいいみたいだ。

クロアに、わからないモノは警戒したほうがいいと教わったので、肩掛けバックにいざという時に使う、護身用の折り畳みナイフを取り出せるようにしてあるので、本当に

いざという時に、使えるが、相手はレイより下の少女なので、いきなりナイフを見せられたら、パニックになり、誰だと言っても答えられない可能性があるとこのナイフを買った時に、店長にいろいろ教えてもらったので教えてもらったところは、分かる。
ので、ナイフを出さず、少女をしばし見つめた。
「・・・・・・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・・・・・」
お互い無言どうしで見つめあう。
「・・・・・　・・・・・」
少女が何か言った。
「？・・・・・聞こえない・・・」
「あたし・・・のなまえわエリー」
少しおぼつかない言葉で少女――エリーが、言った。
「おねいさんに・・・・たのみたいことあるんだぁ」
そう言うと階段を上り始める。
レイは、警戒しつつ上った。

――上った先には、廊下があり二つドアがあった。一つは開いてるドアでもう一つが開てないドアだ。エリーは開いてるドアに行くので、レイもついて行った。
開ているドアの部屋は、子供部屋だった。エリーは机の上を指さして、こっち、こっちと言った。机に近ずくと机の上には本があり、その本を開いて読んでみると日記だった。
「これ誰の？」
エリーは、待ってました、といわんばかりに笑顔でこう言った。
「あたしのだよ！！！」
っと・・・・・

エリーの日記　下

「あたしのだよ！！！」
エリーは、待ってました、といわんばかりに笑顔そう答えた。
「あたしわね・・・字、書くの下手なんだぁ・・・だからね、こうして毎日、毎日書いたら下手にならないよってお母さんに教えてもらったの。だから日記書くの！！！」さっきまでは言葉がおぼつかなかったが、今度ははっきりした声で言う。
エリーはそう答えるとレイの近くにある机に近ずくと、机の上にあるペンをとろうとしたが――――とれなかった。いや正確には、手がペンを透り抜けたのだ。
エリーは、とろうと必死に手を動かすがやはりとれなかった。
エリーは、笑顔をなくし声を震わせてこう言った。
「だけどね・ヒック・・・とれないんだぁ・・・ペンが・・ヒック・とれないんだぁ。」
エリーは、目に涙をうかべながら言い続ける。
「お母さんは、部屋で泣き続けるしぃっ・・ヒック・・お父さんはいないし、誰も見てくれないし、そのうちみんないなくなっちゃったんだぁ。」
エリーは涙流し、レイに抱きつこうとしたが、透り抜けてしまった。
「お母さん達が出て行く時も止めようとしたようとしたよ！！だけど！！だけど！！止めれなかったの！！止めれなかった！！止めれなかったのぉ！！」
エリーは涙で顔がぐちゃぐちゃだった。それでも言い続ける。
「そうして気ずいたの、いや気ずきたくなくて忘れさせてた。あたしはね・・・あたしは・・・もう死んでたんだよ・・もう死んでいるんだ！！！！あたしはユウレイなんだ。そうユウレイ・・・・。」
エリーは、レイを見つめて言う。

「だからね。怖かったの・・・・あたしがもうユウレイだからみんなに忘れられて、このまま・・・消えるんじゃないかって・・・だからおねいさんにお願いしたいんだ・・・・お礼もするからおねがい・・・します。」
レイは、どうするかまよった。もちろんエリーのお願いは叶えてあげたいだけど、自分には叶えられない願いだったら駄目じゃないか！！レイは答えた。
「その願いこと・・・何??」
エリーは、はっとして、涙をぬぐい答える。
「肝心なとこ言うの忘れてたね・・・・あたしの願いごとは――――
真っ黒い猫クロアは、あれからレイ探していた。いまは夜なので、猫としては動きやすいがレイは人間だ。きっと迷ってたりするのだろうか、それにさっきの少女はユウレイだ。しかも長くいるものだ。悪い予感がし体を震わせる。ふとまだ家が崩れてなかったりするところがあり近ずいてみるすると――――
ドアが開きレイが出てきた。「レイ！！！！！」クロアはレイに近ずく。
「レイ！！大丈夫か！！」
「?・・・・大丈夫だけど???」
クロアは、溜息をし、れいを見るするとレイの足に靴を履いていた。
「レイ・・・この靴どうしたの???」
クロアは尋ねるとレイは「お礼にもらった。」
と言い。歩き始めた。
「ちょ！！！！」
クロアが慌てて歩く。
レイのバックの中に、エリーの日記が入っているのは、レイとエリーだけしか知らない。

エリーの日記　下（後書き）

おまけ

「レイ、待てと言ったのになんで待てなかったんだ」
「・・・・・・ごめん」
「ハァ・・・・心配したんだから今度はきおつけろよ」
「・・・・・うん！！」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1135d/

旅　生きる意味を求めて

2010年10月9日21時17分発行